

# 地球を破滅におとし入れかねない電磁スカラー・パルス砲の存在に

## ついて — スティーブン・グリアの講演から — その 3

グッチ

### もくじ

電磁スカラー・パルス砲はポータブルサイズになって地上、海上、地球近傍などあらゆる場所に設置されている 2 ページ

エリア 5 1、国家安全保障局 (NSA)、ペンタゴンで働き、地球・地球外の両方のコミュニケーションを担当していた人物が今ではグリアに協力し、ET 側が介入するレッドラインが 2 0 2 6 年か、その少しあとであることを告げた

4 ページ

闇のグループは小惑星を電磁システムで捕捉し、軌道を変えて地球をかすめさせ大破局を起こそうとしたが、ET 側が介入しそれを防いだ 7 ページ

1 9 8 9 年 5 月 7 日、南アフリカで空軍に撃墜された UFO 1 1 ページ

なぜ先進的テクノロジーの ET 宇宙船が撃墜されるのか 1 3 ページ

グリアたちが CE-5 のコンタクトで呼び出した ET 宇宙船が電磁スカラーパルス砲で攻撃された 2 2 ページ

ET 宇宙船が 3 次元空間に出現したさいに発するニュートリノ光がキャッチされターゲットになっている 2 3 ページ

意識科学の悪用 — ET 宇宙船のナビを念動でハッキングする P 3 作業員

2 7 ページ

違法グループの力は強大であり、早く手をうつ必要がある 2 9 ページ

あとがき 3 5 ページ

電磁スカラー・パルス砲はポータブルサイズになって地上、海上、地球近傍などあらゆるところに設置されている

まず2024年9月6日にロンドンで行われたグリアの講演から、電磁スカラー・パルスの性質について言及した箇所(1:12')を紹介する：

以下グリアの発言

みなさんに電磁パルスシステムについてお話ししよう。

それはポータブルサイズになっていて、汎用四輪駆動車に乗せることができる。

また運び出して従来型の飛行機に積むこともできる。

宇宙空間の人工衛星にも、海上に浮かぶ船舶にも搭載できる。

そして起動すれば、電磁パルスを発し、それは光速で進む。

しかしこのシステムにはスカラーと呼ばれる機能が加えられている。

それを理解するにはテスラのスカラーないし縦方向電磁システムを学ぶ必要がある。

ここであまり深く物理学に踏み込んでも、みなさんはきつこの講堂の暑さの

せいで眠り込んでしまうだろう。

要点だけ言おう。

通常の電磁波光は波である。そして秒速18万6千マイル（29万9千キロ）で真空中を伝播する。

スカラーパルスは進むが、縦方向の振動であり、波の機能はない。

そして光速よりはるかに速く進む。

電磁装置にスカラーパルス機能を加え起動すると、地球軌道近辺や地球上空や周辺、海面下の物体を打撃するだけでなく、宇宙にも突き進んでいく。

なぜなら光速を越えて進むからだ。

こんな武器が使われている。このようなものはいかなる国の政府も公式に承認していない。

これは危険な武器であり、絶対に廃棄すべきだ。

次に以下、2024年3月13日の講演の第6セッションから、スカラーパルス砲の脅威に起因するレッドラインが迫っていることや、これまでUSAPs側が

スカラールパルス砲を使って仕出かしてきたことを紹介していく。

エリア51、国家安全保障局（NSA）、ペンタゴンで働き、地球・地球外の両方のコミュニケーションを担当していた人物が今ではグリアに協力し、ET側が介入するレッドラインが2026年か、その少しあとであることを告げた

この証人の名前を言うことはできない。私はUAP公聴会で証言するように彼を促したこともあった。

私は彼と出会ってから多くの時間をともに過ごした。

彼は1990年代にネリー複合施設S4（注：エリア51）で働いていた人物の1人だ。彼はまたエグリン空軍基地とライトパターソン空軍基地にもいたことがある。彼はこれら3つの主要施設で上級情報官を務めていた。現在彼はトップシークレット閲覧資格をもち、国家安全保障局（NSA）と連携しながらこの3つの有名な施設の1つで働いている。

つまり彼は反感を浴びる仕事をたくさんこなしながら、それを乗り越えて上院

情報局の局員となり、さらにペンタゴン入りを目指し、それを実現した人物だ。今では彼が伝えてくれた情報はすべてカークパトリック博士によって機密扱いになっている。

なぜ彼を信頼できるかというと、彼は私たちのもとで出来ればフルタイムで働きたいと言っているし、彼が知り得たすべてを明かしてくれているからだ。

彼は勤め先で年俸20万ドル稼いでいる。契約者として働く上級情報官だからだ。彼には扶養する家族がいるし、大学に通っている子どももいる。

家族のために働いている。その意味では彼は私たちと変わらないふつうの人間である。

(中略)

彼は通信業務担当で、地球と地球外の両方の通信を傍受していた。その会話をモニターしていた。

彼によれば、ET側からはっきりと伝えられたことがあり、それはそのままETのテクノロジーを使って自分たちを攻撃し続けるなら、彼らが地球にやってきてそれをやめさせるということだった。

彼はさまざまな折に2026年という年号を耳にした。たぶんそれより少しあ

とになるかもしれないが。

現在は2024年だ。

レッドラインが2030年代にあるとかの話ではない。

20年後とかではない。

私は正確にいつになるか予言することはできない。

時間は事象の地平線上にあるので伸び縮みするからだ。

ある意味、時間は幻である。

しかし事象が起こるまでの距離を測ると、私たちはほぼ行き着いている。

タイムラインが終わりになりつつあるのだ。

違法グループが起こしている問題に対し、メディアも市民も法治国家アメリカ

合衆国も英国も、その他の国々も、動きは極めて緩慢である。

対する闇のプログラムの動きは非常に速い。

彼らのテクノロジーはどんどん進化している。

そして私たち地球人は宇宙から見て、ますます大きな脅威となっている。

私たちの世界は他者を攻撃し傷つける世界と化している。

これは大問題だ。

闇のグループは小惑星を電磁システムで捕捉し、軌道を変えて地球をかすめさせ大破局を起こそうとしたが、ET側が介入しそれを防いだ

(2024年3月13日の講演の第6セッション)

休憩に入る前にもう一つの事案についてコメントさせてほしい。

氏名公開を望まないトップシークレットの証人の1人だ。彼には表に出られない事情がある。

彼は現在、違法プログラムの中で非常に高い地位にある。

そして私も耳にしたことのある、ある作戦に数年前に関わっていた。

私はこの違法プログラムの中に潜む情報源から、彼らが地球に破局を起こそうとしているという情報を聞いていたのだ。

そのために使うのは宇宙空間で物体をコントロールするための重力子ビームのような機能をもった電磁システムであり、それは巨大な岩である小惑星を捕捉

できる。

その作戦が行われる位置は地球から見て太陽の方向にある。

太陽光に邪魔されて地球からは見えない位置だ。

その電磁システムは地球への脅威となる小惑星を捉える。

小惑星を移動させ予定の軌道に乗せる。

地球に衝突はしないが、大西洋上をかすめたあと太平洋上をかすめるように飛ばす（注：調べてみると直線軌道の場合、キューバからニカラグアに抜ける軌道でないとそのようなことはできない。地球接近後も軌道をコントロールできるのなら話は別だが）。

海面すれすれに飛ばせば巨大な津波が起こったことだろう（注：小惑星の大きさにもよるが、秒速20 kmほどの小惑星が地上近辺の濃い大気の摩擦で火の玉となって爆発すれば衝撃波で大変な被害が出る。爆発しないで海面すれすれを飛んだ場合、秒速20 kmの小惑星が巻き起こす破壊的な風が海水を巻き上げて、地震による津波とは異なる巨大な津波が発生する可能性はある。コンピュータによるシミュレーションで確認する必要があるが）。

その津波はヨーロッパ、アメリカ合衆国、アジアなどの沿岸地域を洗い流すこ



とになったはずだ。

この大惨事が起こらなかったのはひとえに ET 文明側が小惑星に物理的に干渉し、その軌道をそらしたからである。

このプログラムに関わった彼はこれが事実であることを知っている。

私もそれが事実であると言える。

みなさんはこの闇のプログラムが如何に危険であるか分かったことだろう。

私が救急医の仕事を放り出した理由も理解いただけるのではないだろうか。

彼らの電磁システムには実際このような能力があるのだ。

地球周辺の宇宙空間には、無数の岩石が存在する小惑星帯というビリヤード台があることを思い出してほしい。そこから小惑星がはじき出されることを想像してほしい。

6500万年前に恐竜を絶滅させたサイズの小惑星がこのシステムで引き寄せられることだってあり得る。

彼らは同様に地球の回転軸の安定性を変化させ、両極をひっくり返すこともできるはずだ。

極のシフトは過去にも起こった。

(注：グリアは磁極反転と自転の回転軸のブレを混同していると思われる。N極S極が入れ替わるポールシフトは過去1億7千年間に500回以上起こっているが、これは磁気の話。地点としての北極・南極が180度回転するわけではない。地軸の傾きは4万1千年の周期で22～24.5度の間を変化するが、この地軸が上下入れ替わるようなことが過去に起こったことはない。地軸の傾きは45億年前の原初の地球形成時に巨大天体が1回衝突したことによって出来たと考えられている。)

地球物理学的な大異変の中には人間が作り出すことができるものも多数ある。

自然災害のように見えるが、実は人間が関わっていたというようなことがあるのだ(注：グリアの念頭には「その1」で言及した電磁スカラーパルス・システムがスマトラ沖のM9.1の大地震を起こしたケースなどが思い浮かんでいると思われる)。

## 1989年5月7日、南アフリカで空軍に撃墜された UFO

(2024年3月14日の第8セッションから)

これは情報機関によって確認された重要なドキュメントである。この事件が起こったのは1989年5月7日だった。その日南アフリカでET宇宙船が撃墜されたのだ。この件について今ちょっとコメントしておきたい。

ET宇宙船撃墜で手に入れたテクノロジーを所有する連中はアメリカ合衆国本土だけで活動しているわけではない。アメリカ合衆国が世界のすべてではない。ET宇宙船撃墜はグローバルな現象なのである。

撃墜に使用されるのはスカラー機能をもった電磁パルスシステムだが、その始まりはかなり昔のことになる。そしてその追跡撃墜システムは年々改良され、地球上いたるところで稼働することになった。

1990年代には撃墜の証言者がボリビア、ペルーなどにもいて境界などはない。

## UFO Shot Down In South Africa by Air Force May 7, 1989

...in an effort to maintain reporting further  
of the strange occurrence.

That report is not true that there was something very  
strange about the whole affair and we have not been so  
quick to discuss UFO sightings along that day".

ONCE AGAIN, WE HAVE A CONSPIRACY "OFFICIALLY" NOT  
DISCLOSED TO US, UNLESS WE A REAGAN TO KEEP QUIET  
ABOUT THE SUBJECT.

**THE SOUTH AFRICAN AFFAIR**

During the first week in July 1989, I received  
information from a South African source to the effect:  
"A UFO had been shot down by a South African fighter  
jet on the 7th May 1989, and that the object had  
crashed in the coastal inland desert. The object had  
been captured intact, together with two live alien  
bodies, and taken to a South African Air Force base. The  
South Africans were quickly joined by American Air Force  
personnel who had flown out from Widgic, Potchefstroom, Air  
Force Base, America. A letter from my contact read as  
follows:

"Our Air Force Intelligence do not have the facilities or  
knowledge to pursue this matter alone. According to the  
base command, it is the third space craft they have  
recovered in the past two years over the South African  
inland. We were told to keep everything under wraps as  
it may cause panic in an otherwise solidly secure area. They  
told us that they would keep us informed as to any  
further developments.

"I now enclose this letter reaches you in one piece because  
if it is interrupted I will be in a great deal of  
trouble. Please let us know as soon as you receive it.  
Unfortunately we were not allowed to take camera inside  
with us for obvious reasons".

"I am sending you some government notes at the briefing  
room separately. I can't be able to sign my name or  
address to accompany these documents in case the letter  
is intercepted".

"I could find out later, I received a message from South  
Africa containing a letter and five pages of a briefing  
document. The first document mentioned the South African  
Air Force crash at the top of the page, and was headed:

**CLASSIFIED TOP SECRET - DO NOT REVEAL**, below this was  
the heading:-

"This file has been classified by S.A.F.I. information  
not to be divulged - Top Secret".

The next page again bore the South African Air Force  
crest and the page was headed "Classified Top Secret" -  
do not divulge.

Below were the words: "RECOVERY OF PHYSICAL  
EVIDENCE FROM RECOVERY". Below this were the words:  
"RECOVERY OF ALL RECOVERED MATERIAL". The rest  
of the page was then laid out as follows:

DATE: 7 May 1989.  
SUBJECT: Unidentified Flying Object.  
CODE WORD: Black Room.  
DISPATCH: Air Force Base - Pretoria.  
DISPATCH CHANNEL: TOP SECRET.  
DISPATCH CODE: Illustrated Note.  
DISPATCH UNIT: SA.  
DISPATCH METHOD: Blue.  
DISPATCH CONTROL: PROCEED WITH CAUTION

The following page read as follows: **NOTE - AN AIRCRAFT \*  
CRASHED OVER A RANGELAND AREA IN THE  
REPUBLIC OF SOUTH AFRICA**

"At 13:45 GWT on 7 May 1989 the usual flight White Swan  
\* advised Cape Town to report an unidentified flying  
object had appeared on radar scopes, heading towards the  
African-inland in a north westerly direction at a  
calculated speed of 2500 nautical miles per hour. Most  
headquarters acknowledged and confirmed that the object  
was also being tracked by air force radar, military ground  
radar, intelligence and the Civil Aspect.

"The object entered South African air-space at 13:52 GWT.  
Radio-contacts was attempted with object, but all  
communications proved fruitless. As a result the armed  
forces were alerted to the area.

THE JOURNAL OF UFO INVESTIGATION PAGE 3

このような南アフリカで起こったケースもあるし、既にお話したように韓国で  
起こった大規模なケースもあるなど、あちこちで起こっている。

これらはすべて ET 宇宙船に関する資料だ。

私たちはもちろんこのような事例の資料はやまほどもっている。

それを読めば UFO 墜落回収のプロセスを知ることができる。

(注：当講演では上の資料映像がモニターに映し出されただけで、内容の説明  
は特になかった。この資料の全文は CSETI のアーカイブにある。

[CSETI のアーカイブ](#)

Archive/UFO Crash Retrievals/South Africa/South Africa UFO Crash ref2.pdf

南アフリカで UFO が撃墜されたとき南アフリカ空軍機が使った武器は電磁スカラー機関砲である可能性が極めて高い。この資料は訳出してファイルにした：「[南アフリカ UFO 撃墜事件](#)」。

そのテクノロジーと科学の側面を少し検討したいところだが、それは別のセッションで扱うことにする。

### なぜ先進的テクノロジーの ET 宇宙船が撃墜されるのか

地球にやってくる極めて先進的な ET 宇宙船を撃墜するにはどうすればいいのか、実験的な試行錯誤があった。なぜなら通常のみ사일のような物理的破壊を行う武器で攻撃をすることもできるが、その成果は極めて少ないだろう。なぜ成果が少ないか、撃墜の可能性が低いかというと、宇宙船は硬いし、追尾できないほどのスピードで飛ぶからだ。たまたまそんな方法で撃墜できたとしても、それは未開部族の人たちの投げた石がたまたまヘリコプターの回転翼に当たって墜落させた場合に等しい。

そんなことはめったに起きないが、理論的にはありえる。

しかし、一旦 ET 宇宙船が電磁電子システムで動いていることが分かると、撃墜に効果的なアプローチは既にお話ししたようなものにとって代わられたのである。つまり宇宙船をただ追尾するだけでなく、電磁指向性エネルギービーム兵器で攻撃するやり方になったのである。

指向性エネルギー兵器（DEWs:Directed Energy Weapons）についてはメディアでも盛んに取り上げられているが、みなさんがメディアで目にするそれは、極秘プロジェクトがすでに1940年代、50年代に作り上げていたもの比べて洗練度が低いと言えるだろう。ここ20年ほどで公開されてきた指向性エネルギー兵器と、極秘の T S S C I（Top Secret Sensitive Compartmented Information 最高機密隔離情報）プログラムの兵器とを比べると、そのギャップはものすごく大きい。とても大きなテクノロジー上のギャップがある。

ET たちは違法グループがこの非常に進化した武器を使っているために、このグループがやっていることをなんとかやめさせる必要がでてきた。

ET たちはこの連中が何をしているかを知ったのだ。

ET 宇宙船撃墜・回収がもっとも頻繁に行われた時期に…。

ET 宇宙船が地球近傍にやってきて、次元間形態から物質的な3次元形態に変

わったとき撃墜される可能性が高かったのだ。

ET たちから我々の証言者に伝えられたメッセージによると、これは前のセッションで扱ったことだが、「2000年初めのころネバダ実験場でやっていたことに私たちは気付いている。こんなことはもう許してはおけない」ということだった。

それで ET たちは自らを守るために次のステップを踏み始めている。

これは大きな変化をもたらすプロセスだ。

起こっている事態は明白である。それが正される。

我々は各自が常に最後の戦いをしているようなものではないか？

各自迫ってくる破局をバックミラーで見ながら走っているのではないか。

我々のテクノロジーの進化の過程を見、それから ET たちの進化も見て、我々が今何をすべきか、事態を是正するために何をすべきかを考える必要がある。

多くの人がよくこう言う：ET たちがそんなに進歩しているのなら、どうして撃墜されるようなことが起こるのかと。

そんな疑問もあるだろう。しかし私の知る限り、宇宙で完全無欠な存在は唯

一、大いなる霊 (Great Spirit)、大いなる存在(Great Being)だけだ。

たしかに ET たちのテクノロジーは非常に進歩している。しかし、だからと言って惨事が起こらないわけではない。

起こりえないことが起こってしまった。

撃墜宇宙船の回収などは本来ありえないのだ。

従来テクノロジーではそんなことはできなかつただろう。

100%無理だとは言えないが、現実的にはできなかつただろう。

ET 宇宙船を撃墜せんとする試みは毎日続けて総計何千回も行われたはずだ。

そして宇宙船が3次元形態をとっているときに撃墜することが年にほんの数回あるかもしれない。ET 宇宙船をターゲットにするこの作戦には100%の撃墜率はないのだ。

しかし、年に数回でも、ささいな数ではない。墜落が起こらないのではなく、起こっているのだから。

我が国の先進テクノロジーで作った航空機でも、地方空港に着陸を試みて失敗し、たくさんの死者を出したことがある。ボーイング747が何機もシステム



の故障で墜落している。スペースシャトルの空中爆発事故もあった。これが我々のテクノロジーの現状だ。

宇宙船の場合でも、失敗やエラーがありえる。これは本当のことだ。

非常に進んだ文明のテクノロジーでも100%フェールセーフではない。

完全なものなど存在しない。

私がよく聞かれる質問の1つが、なぜ先進的テクノロジーのET宇宙船が撃墜されるのかというものだったので、今この問題を論じている。

私がいつも指摘していることだが、これは毎日起こっていることではない。高い頻度で起こっていることではない。しかし80年とか100年とかのスパンで見ると、かなりの回数起こっている。

海軍情報局の人物が私に語ったところによると、ET宇宙船撃墜の主な目的は2つあるという。ひとつは先進テクノロジーを手に入れて研究するためだった。もうひとつはET文明に対し、地球は自分たちの惑星なのだから許可なしに来ることは歓迎しないと知らしめることだったという。

とても残念なことだ。私はET文明との最初期の接触をこんなやり方で始めたのは大きな間違いだったと語るゴールドウォーター上院議員に強く同意する。

ET 文明とのコンタクトは決して軍隊や極秘の情報活動が手掛けるべきではなかったのだ。科学者や外交官たちが手掛けるべきだった。これに尽きる。

しかし第二次世界大戦後の余波として冷戦が起こり、東西陣営が競い合う緊張が始まり、軍拡競争が起こり、宇宙進出レースがあり、新規の核兵器開発、熱核兵器開発などが次々と起こった。軍産複合体側の観点で見ると、このような状況はまさに先進テクノロジーの需要を高めるものだった。こうして回収した ET 宇宙船を分析・学習（リバースエンジニアリング）し、そのテクノロジーを極秘に応用していったのだ。誰も思っていないようなことが起こっていたのである。

核起爆装置はエース・ハードウェアのような普通のショップで手に入れることはできない。多くの従来のシステムも非常に秘匿性が高い。そのため回収チームが存在して特別な訓練を受けている。B2 ステルス爆撃機が墜落しても、すべての残骸が回収される。なぜなら、部品の多くは機密であり、その使用法などが知られてはならないからだ。逆に ET 宇宙船の仕組みを知るために回収が行われることも理解できるだろう。

ET 宇宙船のテクノロジーは B2 ステルス爆撃機の構造と比べてれば段違いであり、軍事利用のための科学的研​​究開発の対象として大いに価値があるだろう。

この話にまつわる悲劇の1つは、世界を救うことのできるテクノロジーが世界を破壊することもできるという点だ。

私がいつも指摘していることだが、テクノロジーそのものが問題なのではなく、テクノロジーを使う者たちの意識が問題なのである。

この先進テクノロジーを手に入れている者たちの意識がどうであるかだ。

私はいつもこの話をしている。

私は医者として多くの人たちをみてきた。

ナイフはそれを使ってディナーの料理を切ることもできるし、誰かの喉笛を切り裂いたり、心臓に突きさすこともできる。

つまり人の意識次第だ。

どちらのケースも起こり得る。道具自体が問題ではない。

テクノロジーを使用する者たちの意識や意図が問題なのである。

テクノロジーを社会的共同意識で扱っていないことが根本的な問題なのだ。

アイゼンハワーが軍産複合体に戦いを挑んだとき、この問題が明らかになっ

た。しかし、たいていこの種の強力な既得利益集団は自分たちの道を突き進む

ものだ。この問題を追究して、破壊的な道を進む必然性はなかったのだと気付くことはとても重要である。ET 宇宙船の追跡撃墜に使われている先進テクノロジーを社会のために善用することもできるはずなのだ。

ET 先進テクノロジーの善用は我々がペンタゴンで行うブリーフィングでも推奨していることだ。

しかしもちろんペンタゴンで働く人たちは誰も ET テクノロジーや、闇のプログラムにアクセスすることができない。将軍たちでもできないし、提督たちでもできない。できる者とできない者がいる。この驚異的なテクノロジーを破壊ではなく、平和で外交的なコンタクトやコミュニケーションに再利用すべきだったが、我々はまだその地点に達していなかった。

UFO 撃墜・回収のもうひとつの側面は今日さらに大きな問題を起こしている。その問題について私は前のセッションで論じ始めていた。

レーダーによる追尾システムによって初期的なスターウォーズが始まり、電磁スカラーシステムが登場し、そしてそれが兵器システムと追尾システムの両面においてどんどん改良されていった。

1940年代にさかのぼってみよう。

そのころはまだ人類の人工衛星は地球の周りを飛んでいなかった。人類はかろうじて大気圏でジェット機やロケットを飛ばしていた。レーダーや天体観測はあったが、後に現れるものはまだ何も存在していなかった。

しかし1960年代に入ると、いろいろなものを打ち上げ始めた。写真撮影ができる偵察衛星などだ。大手メディアのPBSショーで1968年に取り上げたニュースでは、地上で人が読んでいる新聞記事を読み取れる人工衛星を打ち上げたと報道した。これは本当のことだった。

1960年代以降、今日にいたるまで多くの衛星が打ち上げられている。私はそれらの人工衛星がどんな機能をもっているかについて多くの情報を手に入れている。偵察能力だけでなく、攻撃システムについても知った。

さてここで再び（注：1947年ごろの）ロズウェル空軍基地を例にとろう。この基地に装備された新型「レーダー」は追尾する機能だけでなく、電磁指向性エネルギーシステムで攻撃する能力ももっていた。その兵器が（注：その後80年間で）どんどんパワフルになり、改良されてきたことを想像してほしい。

今ではこの兵器は人工衛星に搭載されているし、航空機にも装備されている。

## グリアたちが CE-5 のコンタクトで呼び出した ET 宇宙船が電磁スカラーパルス砲で攻撃された

私自身コンタクトチームがシャスタ山で ET 宇宙船を呼び出したとき、ボーイング 747 軍事改造機がその宇宙船を攻撃したのを目撃したことがある。747 はエネルギー兵器から猛烈な放射をした。そのビームが我々の正面 200 ヤード（約 180 m）か、おそらくもっと近いところにある木立まで届いた。飛んで来たビームがちぎれ、あっという間に木立を突き抜けて落下し、地面に当たった。地面全体がブブブブブブと 15 秒ほど鳴動した。私は最初いたい誰がこの茶色の光線を発したのか、私のコンタクトチームの誰かが電気をショートさせたのかと思った。そうであったとしても、非常事態だ。私はこの目で光線をみた。私たちのチーム全員がそれを見た。

幸いこのケースでは ET 宇宙船はまだ一種のプラズマ光状態であり、3 次元空間に出現していなかった。それで亜空間に引っ込むことができた。我々がエネルギー兵器の攻撃を目にする直前に宇宙船は 3 次元空間から消え失せた。

宇宙船は我々の呼びかけに応じて我々に向かって飛んでいた。シャスタ山の山体の 3 分の 2 くらいの高さから我々に向かっていたのだ。

(注：シャスタ山はカルフォルニア州にある4321mの山。その麓はCE-5のコンタクトによく使われる。このケースで宇宙船はその山体の3分の2くらいの高さで亜空間から3次元空間に出現する途中だったらしい。シャスタ山周辺の上空で待ち受けていたボーイング747軍機（VC-25）からこのポイントに向けて電磁スカラー砲が発射され、そのビームの分離したしずくがコンタクトイベントをしていたグリアたちの近くまで落ちて来たということだ。)

我々のグループはこのように ET 宇宙船撃墜の試みが失敗したところを実際に目撃したのである。しかしながらこれは CE-5 コンタクトを行う人たちに注意を喚起する一件となった。我々は常に ET たちに対し彼らや我々にとって安全な形態、方法、時刻、場所を選んで来るように頼んでいる。まさにこんな攻撃が起り得るからだ。我々は CE-5 プロジェクトを開始した当初から、その可能性を意識していた。

## ET 宇宙船が 3 次元空間に出現したさいに発するニュートリノ光が キャッチされターゲットになっている

もうひとつ言っておきたいことがある。それはニュートリノ光検知システムの発明家から聞いたことだ。このシステムは1970年代に導入されたが、ゲ

ームチェインジャーだった。その理由をこれから述べる。

1960年代に既に ET 宇宙船を狙える施設や人工衛星があった。我々に協力してくれた一人の証言者はヒューズ・エアクラフト（注：ハワード・ヒューズが設立した航空機製造会社、業種は航空宇宙産業）に勤めていた。他にもいくつかの大手の防衛関連企業で契約者として働いていた。

彼は私に接触して自分の経験を語ってくれた。彼が1965年からカリフォルニアに住んでいたからだ。彼は年配の男性で天才だった。アレクサンダー・グラハム・ベルの親戚、たしか甥だったと思う。もともと非常に高いIQの人物だったが、違法グループが活動に利用するために、生まれてすぐに MK ウルトラ計画（注：CIA 科学技術本部が極秘に実施していた洗脳実験のコードネーム。Wiki）に似たプログラム下におかれ、さらに知能を高めるように仕向けられた。彼は自分が極めて強いダメージを受けた人間であると言っていた。彼の体験は公にできないほど酷いものなので彼が存命中は名前を伏せておいた。ちょっと話が脇道にそれたので本題に戻そう。

（注：グリアは2024年9月8日のロンドン講演でも、この人物に触れている。それによると、この人物はアメリカ中央軍 Central Command があるフロリダ州タンパ出身の電磁気学の天才で、亡くなる前にニュートリノ光検知シス



テムを発明したという。グリアとは1974年に出会った。グリア19歳の時である。)

彼は自分が関わった作戦について語ってくれた。自分たちはET宇宙船を撃墜したと。彼は実際そう言ったのだ。撃墜する武器を陸上や、海上や、上空にもっていた。しかしその武器のトリガーになるのはニュートリノ光を検出する装置を搭載した人工衛星だった。その装置が宇宙船の出現をキャッチし、武器をその方向に向けさせて撃墜したのだ。

地上施設にEMP（電磁パルス）発生装置が設置されてから10年後にはニュートリノ光検出装置を搭載したNRO（アメリカ国家偵察局）の人工衛星が飛んでいたことを想像してほしい。その装置によってET宇宙船が3次元空間に出現したポイントをキャッチできたのだ。

宇宙船は次元間・亜空間を光の速度を超え、電子の速度を超え、物質波を超えて移動するが、その亜空間から3次元空間に出現するとき、ニュートリノ光を撒き散らす。それをニュートリノ光検出装置がキャッチする。現在その装置は南極、その他の地上地点にも設置されている。1970年代初めに設置されたものだ。それから50年経った。1960年代半ばから1970年代半ばにかけてテクノロジーには大きな飛躍があった。正確に追尾するだけでなく、

宇宙船を撃墜する能力もそれ以降どんどん向上していった。陸海空で、そして宇宙においても。

もちろん違法グループはこのような攻撃機能をもった人工衛星など存在しないと否定するだろう。なぜならこれは第一にあらゆる国際条約に違反するからだ。しかし国際条約がこの反社会的病質者、サイコパスの違法グループの行動をやめさせることはできていない。彼らが自分たちの正体を隠す第二の理由は、彼ら違法グループは国会の上院や下院議員たち — その中に私の知り合いもいる — に自分たちがこのような能力をもっていることや、その能力を何の規制も受けずに自由に使っていることを知られたくないからだ。繰り返すが、このような活動は大統領の認可を受けていない。この連中はふつうの組織の装いをしているが、実は犯罪組織であり、人類だけでなく、地球外文明にとっても危険である。

さて1970年代から現在に話を進めよう。現在彼らはターゲットに侵入する遠隔透視や、いわゆる光速クロスポイントを達成したシステム兵器の双方において格段の進歩を遂げている。つまりスカラー兵器だけでなく、遠隔透視やその他のテクノロジーを進歩させている。

このような軍備拡大が継続している。宇宙における軍備拡大が続いているの

である。

彼らは国家や世界の安全保障を脅かし、世界の安定と平和を脅かす強大な力をもっている。

この危険な状況はますます悪化している。

しかしまたこの状況はET文明にとっても大きな問題である。

ET文明の堪忍袋がいつまで持ちこたえられるだろうか。

いつ我慢の限界が来るだろうか。

我々はそれを知らないし、知ろうともしていない。だからこそこの問題は早く解決しないとイケないのだ。

## 意識科学の悪用 — ET 宇宙船のナビを念動でハッキングする P

### 3 作業員

ここで私が指摘したいもうひとつのポイントは意識科学の研究において起こった飛躍的進歩だ。意識科学などというもちろん怪しげな分野として片づけ

られがちだ。しかし実は意識の力の真相が公になる一步手前まできている。私がそう確信するのは、3次元科学だけでなく意識の多次元性を扱う意識科学の存在を我々が理解し始めたからだ。意識科学は遠隔視(リモート・ビューイング)に役立つだけでない。意識科学が扱う意識の力や伝達は人工衛星に搭載された繊細なニュートリノ光検知装置ですら検知できない領域にある。そして意識の力はテクノロジーの支援を受けて極めて正確に機能する。

意識をテクノロジーで支援する話は後で論じることにする。

今もうひとつ指摘しておきたいことは、意識を攻撃に使う武器にすることもできてしまうという点だ。

前に言ったとおり、P3 作業者たちは意識フィールドを使えるように訓練を受け、そして ET 宇宙船からリバースエンジニアリングした物理的なテクノロジーも応用して、ET 宇宙船のナビシステムをハッキングできるまでに能力を高めた。そして 3次元空間で宇宙船を電磁パルス兵器の照準域に誘導して撃墜するのだ。

私はこのような作戦を遂行している 2つの施設を見てきた。前にも言ったように、どちらの施設も毎年 1機か 2機の ET 宇宙船を撃墜している。この 2つの施設で合計年に 2機から 4機撃墜していることになる。私はこの少し離れてい

る2つの施設上空をヘリコプターで飛んだのだ。

この施設で行われていることが、もうひとつの大きな問題となる。

P3 作業員となるように強要された貧しい人たちのことだ。彼らに対して一種の人権を無視した残虐行為が行われている。彼らの内、大部分の者が死んでいる。死なずに済んだ者もいる。彼らのうちの多くが昏睡状態に陥り、そのあと死んでいるのだ。生き延びて動ける者でも、もちろんダメージを受けている。そのうちの数人が施設から逃げ出し、我々のもとに辿りついて、我々の活動を手伝ってくれている。

彼らが逃げてきたのはほんの4、5カ月前のことだ（注：この講演は2024年3月14日に行われている。彼らがグリアのもとへ逃げてきたのは2023年11月ごろということになる。グリアが10月半ばに大けがをして入院中だったころだ）。

## **違法グループの力は強大であり、早く手をうつ必要がある**

違法グループの兵器はこのように初期的なレーダーから初期の電磁システムを経て、今私が述べたような2023年、24年の段階まで進化してきた。

テクノロジー進化の上昇カーブは非常に急であり、ET 宇宙船を撃墜・回収する能力は急速に上がっている。

地球外文明もこれを座視はしていない。彼らはこの進捗状況にブレーキをかけようとし続けてきた。

しかし効果がないので彼らがもうこれまでだと思ったときが怖くはないだろうか。

我々に協力してくれている特殊部隊も、なんとか事態を好転させようと努力してきた人たちも、もう我慢の限界にきている。

私自身、1993年以来、ずっと事態が変わらないことに耐えられなくなっている。

協力してくれている議員たちもそうだ。2日前下院議員6～8人が下院議長あてに書簡を送って、違法グループを特別委員会が調査してくれるよう要求したのだ。これは我々がこのプレゼンテーションをやっている最中に起こったことである。

我々が我慢できなくなるよりも、地球外文明側が我慢の限界に達したときの方がリスクは高い。しかし一方で彼らは我々自身が事態を収め、ET 宇宙船への

攻撃をやむことを期待している。

しかしあなたがこの問題を解決しようとして対処の仕方を検討している為政者か軍人だとするならば、まず対処すべき対象をよく知らなければいけない。あなたが彼らの組織を崩壊させようとしても、彼らはその試みに対して極めて先進的なテクノロジーを駆使して応戦するだろう。それだけでなく、彼らはあらゆる航空機を撃墜する正確無比な攻撃システムを使用するだろう。攻撃ヘリコプター、F16戦闘機、B2ステルス爆撃機、その他どんな航空機でも攻撃目標に定めたら、いつでも撃墜できるのだ。

このような状況であることをよく理解して、事態がこれ以上悪化する前にこの狂気を正す必要がある。

デフコン1（最高度防衛準備態勢）を敷くべき状況だ。

これは全世界的な破局が目前に迫った時の究極の警報である。

もしあなたがこの違法組織を叩こうとしても、もぐら叩き状態になるだろう。

アメリカ合衆国には秘密軍事基地の可能性のある場所が151もあるのだ。

さらにアフリカ、中東、ヨーロッパ、南米、アジアなどなど、そして宇宙にもある。

したがって、この組織を叩くことは非常に大きなプロジェクトになる。

法施行機関の議員が何人か集まってこの違法組織の活動に影響力を及ぼそうと  
というようなレベルとはまるで違う。昨年そのような議員たちと最初の打ち合わせをした時、長いだけで退屈な話し合いになった。

しかし今は違う。彼らも地球規模で考えないといけない問題だと理解している。南極から北極までをカバーする組織だと理解している。

この組織のアジトは世界中に散らばっている。アメリカ合衆国に集中しておくより、たくさんのバックアップシステムを作っておいた方がフェールセーフと  
していいからだ。こうしてこの違法組織は地球規模で展開している。

常に地球規模で移動しようとしている。レースのようなことをしている。

この組織の秘密のプログラムを実行しているメンバーにとって、地図上の地政学的境界線など存在しない。カナダとアメリカ合衆国の境界も、モンゴルと隣国との境界も、中国とロシアの境界もないのだ。彼らはその驚異的なテクノロジーを使って世界中を飛び回っている。

ドローンとか、古くはスパイ航空機の U2 などを使って国境を越えて侵入すれば、検知され追尾される。



しかし電磁フィールドで機体を覆い時速何十万マイルのスピードで移動すれば、それを検知できるレーダーなど存在しない。これは本当の話だ。

彼らは科学とテクノロジーにおいてこのレベルまで来ている。このスピードとステルス性をもっている。誰が彼らを止められるだろうか。中国であれ、ロシアであれ、オーストラリアであれ、世界中のどんな国の政府もこのようなテクノロジーはもっていない。そんな状況では率直に言って、世界はテクノロジーに優れたこの陰謀団の思いのままだ。

私が常に指摘している一番のポイントは、彼らがET宇宙船をリバースエンジニアリングしてその異星文明の先進テクノロジーを手に入れ、それを推進システムだけでなく、武器システムにも応用していること、偵察や追尾にも使っていることだ。

我々が今相手にしているのは80年間に総額何兆ドルもの資金を使ってきた組織であり、世界のどの政府よりも優位に立っている。

資金面での優位性も1つのキーポイントだが、もうひとつキーポイントを挙げるなら、彼らが異星のテクノロジーを使って非常に速く移動し、追跡を振り切る能力をもっていることだ。アメリカ合衆国のどんな機関も、その他の先進国も科学技術レベルの上で全くかなわない。地球の最先端の兵器システムです

ら、私の推定では違法組織の兵器と比較すると5千年から1万年も遅れている。

なぜ私が今これに言及するかというと、数千年も進んだデバイス、ものによってはおそらく数百万年も進んでいる異星のデバイスを研究して指数関数的にテクノロジーを進歩させてきたこの違法組織のテクノロジーと、我々が通常使っている従来のテクノロジーとの間に、ものすごく大きな格差があるからだ。

違法組織は推進システム、コミュニケーションシステム、材料科学をリバースエンジニアリングで手に入れたのだ。

ウィルソン提督も私に言っていた。「この非認可プログラムが所有している先進テクノロジーと比べるとわしらが所有している最高のものはB2ステルス爆撃機くらいだ。わしらはやつらより何周も遅れている」と。提督がこれを述べたとき、彼はETについては言及しなかった。彼は闇のプログラムのことだけ述べた。彼は脅迫を受けていたのだ。

みなさんはこのようなことも理解しておく必要がある。

(第8セッションはこのあと少し続くが、和訳はここまでにする)

(注：米国防情報局の副局長だったウィルソン提督は国防省内に非認可プログ

ラムがあることに気付いて、そのグループのもとに乗り込んで摘発しようとしたが、逆に降格させるぞと威嚇されている。この件は[ファイル](#)にしてある。その解説はこの[ファイル](#)。

その3終了

あとがき

現在（2025年3月13日）グリアはトランプ新政権に USAPs の危険性を訴える書簡や315ページに及ぶ資料集を提出して、調査を依頼しています。政権窓口は検討を約束しているということですが、問題はいくつもあります。

1. 米新政権が矢継ぎ早に行っている大胆な政策のため、現在官民ともに混乱の渦中にあること。関連する国防総省、CIA、FBI、NASAなども人員削減の嵐に巻き込まれていて、調査どころではない状況であること。
2. USAPs 側に取り込まれている [UAP Disclosure Fund](#) がグリアの発信する情報をゆがめてしまう。このグループには CIA で UAP 問題に深く関わっていた [Luis Elizondo](#) や UFO 回収・分析に関わる科学者団体 To the Stars Academy of

Arts & Science 所属の免疫学者 [Gary Nolan](#) らが参加している。エリザンドはグリアを裏切り者と言い、ノーランはアタカマ小人型異星人ミイラの件でグリアと対立した。

3. グリアは証言や証拠書類満載の [アーカイブ](#) を公表し、さらにいろいろな Youtube チャンネルのインタビューも受けて一般向けに精力的な情報発信をし続けている。しかし一般の人の U A P に対する初歩的知識との格差が大きいこと、さらには情報操作されて間違っただけの思い込みをしている UFO マニアもいて、グリアの情報がどこまで浸透するか心もとない。

4. そもそも米政権が U S A P s の存在を認めても、異星文明に由来するテクノロジーで武装したこの闇の集団を通常兵力で鎮圧できるとは思えない。内部からの崩壊を待つしかないのかも知れない。

しかし残された猶予はそれほど長くない。U S A P s の電磁スカラーパルス砲を使った E T 宇宙船撃墜を異星文明はこれ以上許さないといい、母星にまで危険が及ぶ状況になった今、E T 側は介入を通告している。

2026年かその少しあとがレッドラインということで、期限は迫っている。一方 USAPs の中枢には ET の侵略を偽装して人工 UFO + 電磁スカラー砲で地球にアルマゲドンを起こそうとする狂信者がいる。ET 側

の介入がそれに利用される恐れもあり、どんな状況になるか想像がつかない。

ひとつ言えることは、グリアを通じて事実を知っている者は、USAPsの偽装はちゃんと見破ってそれと指摘し、ET文明の介入は侵略ではなく、宇宙秩序を保つための行動であると指摘することができるだろうということです。

なお以下に関連ファイルのリンクをおきます。

1. レッドラインが迫っていることや、USAPsの偽情報に関連したものの。

[ファイル1](#) 2023年6月 ディスクロージャー前のインタビュー：

レッドラインについて

[ファイル2](#) 2023年6月 ワシントンDCの記者クラブでのディス

クロージャー：ET側からの警告

[ファイル3](#) 2023年7月 ディスクロージャーが隠蔽に加担してし

まう場合（1999年のグリアの論考：グリアが今こそ読むべきと送付）

ファイル4 2023年8月 上記のグリアの論考を訳しながら思った  
こと

2. USA P s が小惑星を操作して地球に破局を起こそうとしたり、ニュートリノ光を感知してE T宇宙船の出現をキャッチしたり、電磁スカラーパルス砲でスマトラ大地震を起こしたことなどに言及したファイル（第二部。第一部はナスカミイラについて）。

ファイル5 2024年6月

3. 南アフリカ UFO 撃墜事件についての詳しいファイル
4. 「地球を破滅におとしいれかねない電磁スカラー・パルス砲の存在について」シリーズ

「その1」

「その2」 P 3 に関しては「その2」でも詳しく述べています。

「その3」当ファイル

「その4」電磁スカラーパルス砲の始まり ニコラ・テスラ